2025年6月吉日

市民のための政治を求める大阪市民連合

代表者　梅田 章二 さま

立憲民主党

大阪府参議院選挙区

第1総支部長　　橋口 れい

アンケート回答

1. 南海トラフ大地震への備え

高さ 10 メートル、全長 2.4 キロメートル。世界最強といわれた津波防潮堤が岩手県宮古市にありました。しかし、2011 年 3 月の東北大地震のとき、発生した巨大津波はこれを軽々と乗り越えてしまいます。釜石市にも世界一の湾口防波堤がありました。あのとき、この防潮堤は津波の威力を 4 割強減じ、近隣住民の避難時間も 6 分ほど延ばします。しかし押し寄せる津波を防ぎきることはできず、市街地の死者・行方不明者は 1000 人超となってしまいました。いずれも「鉄壁の守り」「安心の絶対的対策」といわれた施設です。

この 2 例が教えてくれているのは、自然災害の前に絶対の防御はないということです。これがあるから大丈夫、これが私たちを守り切ってくれるという「これが」は、自然の威力の前には存在しません。だからこそ私たち人間は、二の手、三の手、四の手、五の手の対策を講じなければならない。「コンクリートで造られたモノ」だけではありません。人々の「心」に対する対策にも、やはり事前の備えが必要だと考えています。

自然への畏敬の念を忘れず、私たち人間ができうる限りの対策、対応、備えを幾重にも張り巡らせていく。加えて、私たち人間が人としての能力を最大限に発揮できるのは復興です。防災と復興はひとつのもの。日本が最も得意とするリカバリー対策にも十分な厚みを持たせていかなければならないと考えています。

2. スマートシティ計画について

スマートシティ――――――。耳障りのよい言葉です。わたくしも基本的には賛成しています。

ただ、ここ 20 年、30 年ほど、大阪に限らず日本全体がいびつになっているような気がしています。過去の歴史を軽視し、過去を捨てることによって新しいものが生まれるという考え方が広がっているような感じがするからです。

連綿として続く歴史の恩恵の上に、今の私たちは存在しています。過去を棄てて今があるのではなく、積み重ねてきた歴史の上に今があり、これからがあるのだということを忘れてはならないと思います。

スマートシティ計画にも、ですから歴史の流れと文化が積み上げてきたものを切り捨てる形ではなく、それらと和

合しながら新しいものを、より発展したものをつくっていくという思想が必要だと考えています。目の前にある一時的な効果効能に目を奪われ、それに踊ってしまうのではなく、100 年をひとつの単位としながら都市と人々の未来をみていく。そのために私ができることもたくさんあると考えています。

3. 大阪・関西万博について

4. IR カジノ誘致について

関西万博と IR は、大阪弁でいう「二コイチ」の関係です。というより、カジノ併設 IR のための露払いとして関西万博があった、といったほうが正しいのかもしれません。

現段階で、露払いとしての関西万博は開催されました。様々に指摘されている問題点も弥縫策的にしのいでいきながら閉幕となるのでしょう。したがい、焦点となるのはその後、つまりカジノ併設 IR となります。

IR そのものには反対はしません。大阪には、たとえばサミットを招致できるようなエリアがないということは指摘され続けてきましたし、過去にサミットの開催はあったものの、京都に比べて主要国のトップを招き入れられる魅力に欠けているのは確かです。また、訪日する多くの人たちの時間をつなぎ止める魅力も京都に比べて薄い。そこで IR を、という発想になったのだと思います。

問題はカジノです。端的にいえばバクチであり、賭場ですが、日本は有史以来、公権力がその胴元となったことはありません。むしろバクチを禁じてきたのが日本の歴史なのです。競馬、競輪、競艇も、その流れのなかで、公権力のコントロール下に置いて開催されているものです。

ところが今回のカジノです。「私」の部分が大きいように考えています。私営的な側面が多くなれば、運営側は当然、私欲の増大をはかります。犠牲となるのは、もちろん一般のプレイヤーたちです。

同時に、ギャンブル依存症の問題があります。相談窓口など依存症対策は打ってあるとはいいますが、それらはすべて「依存症なってしまったあと」のこと。事後ではもう遅いのです。

なぜ日本の人々は長い歴史のなかでバクチを忌避し続けてきたのでしょうか。公権力側も、なぜこれを禁じてきたのでしょうか。答えは明々白々です。人心を狂わせ破壊し、社会全体をも暗く陰鬱なものにさせてしまう、それは「大悪」だからです。

あかんものはあかん。私はカジノ誘致の部分に徹頭徹尾の反対をしています。

5. 国際港湾物流拠点の重要性について

1995 年 1 月に発生した阪神淡路大震災。あのとき、大切な人命だけでなく、多くのものが神戸から、そして関西から消え去り、失われました。そのひとつが国際港湾物流拠点としてアジアナンバーワンのハブ港であった神戸港です。

震災によって大きく破壊され、港湾機能を失った神戸港はコンテナ貨物の多くを韓国に奪われ、その後の神戸凋落の一因となりました。30 年が経った今も往事の回復はみせていません。

私たちの生活のすべては物流によって支えられています。スーパーに当たり前のように並んでいる商品たちも、トラック輸送を中心とした物流が揃えたものです。あるいは、個別の宅配によって日々の食事をまかなっている高齢者もいらっしゃいます。それら国内に流通しているモノたちの多くは、元々は港湾を通じて海外から運び込まれたものです。

物流は経済の動脈といわれますが、なかでも港湾物流は経済の浮沈を左右する基礎石となります。これを軽んじるかのような夢洲の第 2 期プランに、安易な賛同はできません。自然災害によって神戸港は国際的なコンテナ貨物ハブ港の地位を失い、それが神戸全体の活力を奪ってしまった。今なお昔日の神戸の姿はありません。その例が隣にあるにもかかわらず、自らの手で港湾機能を減じる施策を打つ。大阪、関西を浮揚させるためのプランが、大阪凋落の引き金となってしまうのではないかという危惧を抱いています。

港湾事業も物流事業も、目にはみえにくいものです。みえにくいものだけれども、それがすべてを支えている。この当たり前のことが夢洲第２期プランのスタート時点から大きく欠落していると思っています。

6.「国際観光都市・大阪」構想について

アンケートのすべてを読ませていただいたとき、これは一本の流れの上にあるものだと感じました。最後の回答も、ですからそれに伴ったものにするのがよいかと思います。

設問１から６までの懸念はすべて、「哲学」というものが大きく欠落しているがゆえに発生している問題です。

私は「敬天愛人」という言葉を座右としています。天を敬い、人を愛す。もうひとつ加えて、天を敬い、人を信じる、としてもよいかもしれません。南海トラフ地震の備えにも、スマートシティ計画やカジノ併設 IR にも、そして夢洲第２期プラン、観光都市構想にも、この「敬天愛人」の精神が欠けているのです。

意訳が許されるならば、それは「人間として正しいことを正しく行なう」となるでしょうか。その精神、その原点に一度立ち戻りながら、再び設問１から６までのすべてを考え直してみることが必要だと考えています。正しき哲学なき計画、構想は早晩破綻をきたしてしまうことは、歴史が教えてくれているのですから。

効率性や時代性ばかりを追い求め、きらびやかに飾り立てた計画、構想は要りません。まずは足下を見据えながら、そして「敬天愛人」の精神に照らし合わせながら諸々のものを見直し、再構築をしていく。そのために私が尽力できることは多々あると考えています。

以上